

さらなる飛躍を目指して

盛岡さんさ踊り31年目の夏

昭和46年に始まった「盛岡川まつり」、その中で好評だったのが「さんさ踊り」。さんさ踊りを主体とした祭りが出来ないかと当時商工会議所観光委員会を中心に検討された結果、現在の「盛岡さんさ踊り」が誕生しました。当会議所は昭和53年の第1回から実行委員会の事務局として活動。昨年30周年の節目を迎え、ギネスに登録された「さんさ太鼓」や、NHK連続テレビ小説「どんど晴れ」効果で知名度も上がり、観光客も増加、東北有数の祭りになりました。祭り本番を前に、「さんさ」が一層成長し、全国に名を馳せるにはどうすればよいか、今後のあり方などについてスタッフ、参加者、マスコミと立場の異なる3人に大いに語ってもらいました。

**30年かけて
大きくなった「さんさ」**
—30年前、参加者数1500人、観客15万人で始まった

「さんさ」が、参加者数3万4千人、観客128万人を数えるまでに成長した要因はなんだったのでしょうか。

—最近の参加団体の特徴はどうですか。

「さんさ」のすごさを知る、「さんさ」が変わる

魅力を伝えるために



関口 「さんさ踊り」が地域だけの踊りだったころは、太鼓は、その地域の数人の男性が叩くもので、女性や子供が叩くことはあり得ませんでした。地域という枠を超え、市民参加型の祭りとなったことで、太鼓の叩

き手は男性といった縛りがなくなり、女性も子供も叩けるようになったことが大きいと思います。

関口 以前は、企業を中心とした職場単位の参加団体が多かったけど、高校生や大学生、専門学校生が自分達で運営も楽しみながら祭りに参加してきてますよね。本当に「さんさ」が好きというチームが生まれてきているのがうれしいじゃないですか。

—「さんさ」が好き、楽しんで参加しているチームが増えてきているというあたりになんかの発展のポイントがありそうですね。

関口 でも実際に「さんさ」を見た人は「期待してなかったけど、すごい！」と感動してくれます。太鼓が1万5千個も出るような祭りは全国どこにもないんですよ。大体それだけの太鼓があつて同じように叩けるなんてすごいじゃないですか。そのすごさに市民が気づけばもっと変わって

高橋 僕は北上出身で、北上といえば鬼剣舞が有名ですが、子供たちが初めて指導を受けるときには、その由来も教えられるそうです。「さんさ」も、もつと由来やそのすごさなどを、参加者たちにも伝えていくべきだし、それが伝統につながっていくと思います。

関口 短期的にみると、やはり全国ネットのテレビの力は



(左) 岩手日報報道部記者 高橋圭祐さん。自身もさんさ参加経験あり。(中央) 盛岡さんさ踊り清流会事務局長 関口みどりさん。踊り手であると同時に今年はミスさんさの指導にもあたっている。「さんさ飛躍懇談会」のメンバーでもある。(右) ホテル小田島専務取締役で「さんさ飛躍懇談会」メンバーの太田代洋一郎さん。

右) 4日間延べ1万5000個の太鼓が、鳴り響く音とその圧倒的な数で会場を包み込みます。

下) 輪踊りの中心、パレードカーも年々バージョンアップ。



大きいと思いますよ。ただ、テレビでは「さんさ」の醍醐味である地響きのような太鼓の音は伝わらないですね。

太田代 毎年全国ニュースで流れるのはチャゲチヤゲ馬コ。あれは、岩手山や田んぼのあぜ道、馬といった風景が、岩手・盛岡に求める田舎らしいイメージと合致するから放送されます。「さんさ」にはそういったイメージがないから、あまり取り上げられないですね。まずできることは、市民レベルの意識を高め、県外の友人・知人に「さんさの魅力」を伝えてもらうこと、口コミによるPRが一番大事だと思います。

高橋 阿波踊りと印象がかわると言われたことがあります。開催時期も近くて、踊りが中心だから。でも「さんさ」には、輪踊りという観客が飛び入り参加できる魅力もありますよね。これはもともとPRすべきです。ただ、型があって自由には踊れないから、すぐに「どうぞ」とはいかないのが難点ですね。

「さんさ」を楽しむために
「参加している人も、見ている人も、楽しむためには。」
太田代 「伝統さんさ」は、見てすごいなって思いますね。以前、PRのためのキャラバン隊として他県に同行しましたが、観光物産館やサイブスエリアとかに観客が200人位集まるんですよ。
関口 そこですごい拍手を受けるんですよ。出た子たちは「すんごくおもしろかった」と言っていて帰ってきます。それがさらに踊りをうまくさせると思います。「さんさ」のパレードの時って、あまり拍手がないじゃないですか。あえて流れを切ってもお辞儀するような場、拍手をもら

える場があるのもいいかもしれませんがね。拍手をもらえれば楽しくなります。楽しくなれば踊っていても自然と笑顔になりますよね。

「さんさ」さらなる飛躍を目指して

「これからの「さんさ」に、必要なことは。」

関口 10年後、今の小学生が、大学生、社会人になったときにどう祭りと係わるか、その受け皿づくりが必要ですよ。歴史も含め教えて、これから10年かけて、「さんさ」が大好きな子供たちをもっとつくっていくのが大切なことだと思います。

高橋 以前、他県の記者を案内した時のことですが、音が響いて、太鼓がいつぱいいて、それに圧倒されて感動するようです。リピーターにする努力はいるのでしょうか、見た人が感動しているものを無理に目新しく変える必要はないと思います。今の「さんさ」を大切にして、これは伝統芸能だという誇り、伝承していくという活動に力を注いだほうがいい。若者受けを狙うより、伝統を大切に

してほしいと思います。

太田代 市民レベルの意識が醸成すれば、祭り以外でも「さんさ」をアピールする何かが常にある状況ができると思います。例えば、「さんさグッズ」が数多く発売されて、街が「さんさ」で溢れているとか。いつ来ても「さんさ」がそばにあることが観光では重要です。盛岡はやっぱ「さんさ」なんだなあと感じてもらえればいいですね。
「将来を見据えた、積極的ないいお話をあげよう」と思いました。皆さんの提案は、これからの「さんさ」の飛躍にとって、とても示唆に富んでいると思います。8月本番に向け、どんどん街も人もさんさ一色になり、市民一人ひとりの気持ちが高鳴ってきてます。31回目の「さんさ」も市民の皆さんと力をあわせ、盛り上げたいものです。

取材／「SANSŌ」企画編集委員会



躍動感あふれる伝統さんさ。その演技に観客は魅了されることでしょう。